

## 硯友會和歌：文苑

著者	松露，蘆月，基紀，山人，萬古刀，蝶二，楔川，江楠
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 7
ページ	5 1 - 5 3
発行年	1897-06-13
その他の言語のタイトル	硯友会和歌：文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4842">http://hdl.handle.net/2298/4842</a>

和歌

硯友會和歌(兼題)

若竹

わか竹の一節くりに雨風をしのをきてこそはいと強くかれ

全

世の外にすむ庵なれと竹の子のうきふしまけくなりける哉

全

今よりはいくその雪やしのくらむすなほに生ふる園のわか竹

全

夕されは庭のわか竹露れきて文讀ひまとも涼しかりけり

全

笛にして君か代の歌かなつらん今年ねひにし宿の若竹

曉起

窓の戸のあけ方近く眺むればまける若葉の心よきかな

全

袖ひちてもる手にむすふ水の面に有明の月の影をこそ見れ

起きいてゝむすふ清水に月すめは時ならず秋のけしきをそよふ

涼しさはたとへん方もなつ艸の露吹きちらす曉のかせ

文苑

五十二

松

蘆

基

山

萬

松

蝶

露

月

紀

人

古

露

二

眞



評曰、しらへたし

梅子垂枝(即題)

白妙にはほふのみかは梅の花ちりし後にも實は結ひけり

評曰、めてたし

新 樹(全)

ほとよきすまはなく聲もゝれぬまでまけりあひたる夏木立哉

全

ゆふ月夜わか葉かもとに我くれは露の玉ちるこゝちこそすれ

全

ゆく人のよすかど今はなりぬなり日にまけりゆく門の青桐

山 吹

露をたもみ川邊にたるゝ山吹のまたゆく水に花のみたるゝ

つゝし

岩つゝし咲きにけらしな龍田山夕くれなるの色に見えけり

あやめ

わかやどのあやめ生ひけりかみつけのいかほの沼のいかにあるらん

蘆 月

基 紀

萬 古 刀

基 紀

やまひと